

1. 教育内容・方法

(1) 教育目標

キリスト教に基づく人格の陶冶という建学の精神を踏まえ、人間環境学部における「人間環境」とは、「環境」を狭義の「自然環境」の視点からではなく、生活環境や社会環境、文化環境のように人間活動の種類に応じて広く捉え、コミュニケーションやメディアおよび人間のネットワークをも包括する広義の概念として位置づけ、「人間を中心」とした特色ある教育を目指している。

この理念に基づく各学科の教育目標は以下のとおりである。

現代コミュニケーション学科

本学科の基本理念は、情報メディアが多様化し、加速する現在の社会に在って、情報を的確に判断・選択し、効果的に自己の考えを発信する知識とスキルをもつ人材を輩出することを目指す。

人間環境デザイン学科

本学科は、「人間環境デザイン」を「人間が生活環境で出会うすべてのものをデザインすること」と位置づけ、人間らしい生活を営むことができる環境を創出する人材を育成することを目指す。

健康栄養学科

本学科の教育の目的は、広く健康と栄養に関して学ぶことによって、個人や地域社会の健康の増進と栄養の改善を通して、生活環境や QOL(Quality of Life)を高める専門家の育成を目指す。

人間発達学科

本学科は、人間の誕生から成人に至る長期的な視野に立ち、乳幼児期から児童期までをトータルに学び、一人の人間が健やかに成長・発達し、人間らしく生きる上での援助ができるための実践的理論を身に付けた専門家の育成を目指す。

(2) 学部の水準による評価

カリキュラム内容について

本学部は性格の異なる 4 学科によって構成される複合学部であり、この異なる 4 学科を学部の理念で統括するための専門科目として学部基幹科目を設置している。特に「人間環境論入門」を必修科目としており、この科目の中で「人間」と「人間と環境の関わり」について問題を提示し、人間環境に対する基本的な認識方法を示すことにより、本学部において何を学ぶのかを明確にしている。

各学科のカリキュラムは 4 学科それぞれの根幹を成す学科別の基幹科目群(3 ~ 5 科目)を配置している他、以下のような分野に分類される専門科目から構成されている。

現代コミュニケーション学科

基幹科目であるコミュニケーション論等の他、言語によるコミュニケーション能力の育成を目指す「国際コミュニケーション分野」、企業人として必要なビジネスの理解とその運用に関する知識と技能を学ぶ「メディア・コミュニケーション分野」、少人数で社会の中の個人という視点から人間の成長を図る「総合分野」の 3 分野から構成されている。

人間環境デザイン学科

基幹科目である人間環境デザイン論等の他、人間の生活環境を社会的・文化的・歴史的観点から考察し理解を深める「生活デザイン分野」、物理的・空間的な環境設計の専門家や居住環境に能動的に取り組む人材育成を目標とした「居住環境デザイン分野」、地球環境保全や産業廃棄物・ゴ

ミ問題などを扱う「環境保全デザイン分野」、学生の社会的拡張性・適合性・自立性の育成を図る「総合分野」の4分野から構成され、二級建築士、インテリアプランナー、商業施設士の受験資格が取得できるカリキュラムとなっている。

健康栄養学科

基幹科目である食環境論等の他、自然科学系の専門科目を学ぶために必要な基礎学力を養う「栄養関連専門基礎分野」、栄養の改善・健康保持促進・食事栄養面からの療養等に関する知識と実践力を育成する「栄養関連専門分野」、食を中心とした環境をより広い人間環境の視座から捉える「学科関連分野」、各自の学問的興味や問題意識をもとに、主体的・総合的に学ぶ「総合分野」の4分野から構成され、栄養士・管理栄養士の養成課程の他、栄養教諭・食品衛生管理者・食品衛生監視員およびフードスペシャリストの養成施設としての認定も受けている。

人間発達学科

基幹科目である人間発達論等の他、乳幼児の保育、幼児教育・初等教育の科目を配した「教育・保育分野」、現代社会が直面している“こころ”の問題について理解を深める「心理分野」、人が健やかに生活し、QOL（Quality of Life）を高めるための健康および福祉を学ぶ「健康・福祉分野」、資格・免許取得に際して体験的・実践的に学びを深める「実習分野」、学科での学びを総合してより深めるための「総合分野」の5分野から構成され、小学校教諭・幼稚園教諭の免許、保育士資格、さらには認定心理士の資格を取得することもできるカリキュラムとなっている。

共通科目は、教養教育のためのいわゆる一般教養科目で構成されている。一般教養科目に関する科目群は、教養・総合分野、コンピュータ・リテラシー分野、外国語分野、保健体育分野の4分野から構成されている。

教養・総合分野では「教養ゼミナール」を必修とする他、「キリスト教分野」（キリスト教の歴史・文化、建学の精神）、「人文分野」（哲学、文学、文化）、「社会分野」（法律、経済、社会）、「自然分野」（生命科学、環境問題）、「生活芸術分野」（日本の伝統文化体験）の4分野から構成されている。これらの分野を配置することにより、幅広く深い教養や総合的判断力を養い、専門という限定した世界に閉じ籠もることなく豊かな知識を身につけた教養人として、各領域で力を発揮できる資質を磨けるよう配慮している。また、「教養ゼミナール」（1年次春学期必修）では、近年の入学者の在り方の変化に対応すべく、初年次の学士課程への導入教育の機能を持たせ、すべての専任教員が少人数のクラスを担当し、講義を聞く心構え、発表や討論の方法、レポートや小論文の書き方などについてきめ細やかな指導を行っている。

コンピュータ・リテラシー分野では、今日の情報社会では欠かせない基礎的な情報処理技術と、ネットワーク社会のルールとマナーを学ぶ科目群で構成されている。

外国語分野では英語（4単位必修）、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語、さらに外国人留学生のために日本語の科目を配置している。さらに英語を基本的ツールと位置付け、コミュニケーション能力を高めることを目的として少人数で英会話を中心とした授業を行っている。

保健体育分野では生涯学習という観点から、生涯に亘って健やかな身体を保持し、健康で豊かに生活できる方策を実践するための分野で、全ての年次の学生が履修できるように配慮している。

適切な履修指導のための制度や工夫

入学時及び各学期始めに、各学科において全学年に対して教務課職員及び各学科教員による履修指導を実施している。この他に適宜個別相談の時間も設け、併せて成績不良者、留年者、休学

者等の学生及び保証人に対して、各自の要望に応じた面接指導も実施している。また、全教員がオフィスアワーをシラバスに明記しているため、希望する学生は各教員による個別相談が可能である。

新入生に対しては、別途「フレッシュマンキャンプ」等を実施して指導をしている。また、「学生メンター制度」を利用して新入生は上級年次の学生に相談ができる。さらに前述した1年次春学期「教養ゼミナール」(必修科目)の担当教員がそのまま履修学生のアドバイザーとなり、卒業まで学生生活・学習上の相談に応じている。

履修登録単位数

履修登録できる単位数の上限は、各学期24単位(1年間48単位)である。学生には各学期24単位まで登録するように推奨している。登録できる単位数に上限を設けることで、予習及び復習の時間が確保出来ている。

シラバスの作成と活用

全科目に対して、シラバスを作成している。シラバスには「授業の到達目標及びテーマ」、「授業の概要」、「授業計画」、「成績評価方法・基準」等が記載されており、一定の書式を使用しているため、教員間で記述項目には精粗がない。また、Web上でも公開しており、Webでの履修登録に連動して活用されている。

シラバスにおける「成績評価方法・基準」の明示に併せて、学生は成績に関する質問が出来る制度が整えられているため、成績評価の客観性及び公平性の確保によい影響を与えていると考える。

ファカルティ・ディベロップメント(FD)活動(授業評価を含む)

学生の学修の活性化と教員の教育指導方法の改善を促進するため、学部FD委員会を設置し、教員研修教授会を開催すると共に、教育指導方法の改善、向上推進のための活動を続けている。

各セメスターにおいて実施する学生による授業評価アンケートは、20名以上の講義・演習科目を対象に、統一したフォーマットで行っている。フォーマットは択一式部門と自由記述欄で構成されており、択一式部門は学生自身の授業への取り組み方と教員や授業に対する評価の項目に分けられており、また必要に応じて学部共通の、あるいは担当者独自の項目も設けることができる。

また、自由記述欄においては、学生の具体的な意見・感想をくみ取ることができるようになっている。アンケート結果は教員それぞれに個別に示されると共に、報告書を作成し学部全体の統計数値等をWeb上において公開している。

2008年度秋学期からは教員相互の授業参観を実施しており、学期ごとに各学科選出の4人の授業を学部専任教員に公開している。また2010年度春学期からは全学の取り組みとして他学部とも相互に公開し、相互評価ができる公開授業を始めている。

2. 評価後に生じた変更事項

(1) 入学定員の変更

2008年度に現代コミュニケーション学科の入学定員を180名から140名に、人間発達学科の入学定員を100名から140名にそれぞれ変更した。

(2) 小学校教諭(第一種)養成課程の増設

2008年度に人間発達学科において小学校教諭養成課程を増設した。